

山田英司(著)

理学療法士列伝—EBM の確立に向けて 山田英司 変形性膝関節症に対する 保存的治療戦略

森岡 周

(畿央大学健康科学部理学療法学科教授)

まずこの本を見た瞬間、「同期生よ！ 思い切ったことをしたな」と思い、いろいろな言葉が脳の中を駆け巡った。それだけインパクトのある表紙と内容であった。「列伝」と聞くと、ギタリスト？ など思ったりもし、果たして理学療法士という職業にそのような言葉が当てはまるかは明言できないが、いずれにしても、理学療法士は医療者でありながら、職人としての要素を含んでおり、それを意図した書であると思う。

本書は3章の構成であり、第1章は「衣鉢相伝」と題して、著者のこれまでの臨床研究をベースとした記述である。衣鉢相伝とは教法や奥義を伝え継承することの意であり、平たくいえば、広く先人の事業や業績を継ぐことに当たる。著者はこれまで主に大学病院に属しながら変形性膝関節症の臨床研究を実施してきたが、それから得た保存的治療戦略に関して、運動学的あるいは運動力学的分析から一つの方向性を打ち出し、その具体的な実践例を丁寧に臨床的に記述している。衣鉢相伝と題されるように、著者には今までの自分の思考をありのままに伝えるが、後輩たちがそれをよりよい方向性に改変し、場合によっては批判し新しいものを創造し提案してもらいたい意図があるのであろう。

第2章は「臥薪嘗胆」と題され、著者のこれまでの理学療法士人生を振り返っている。臥薪嘗胆とは将来

の成功を期して苦勞に耐えることを意味し、先の治療戦略に行き着くまでの歴史を振り返っている。誰しも学生時代あるいは専門家として未熟な時期がある。その未熟な時期に何を思い、何を考え、どのように行動を起こしてきたか、それぞれにそれぞれのドラマがある。その人生を決定づけるのが環境であり、中でも人との出会いが大きい。著者もその一人であり、自分が今の思考にたどり着くまでには、他者との出会いがとても大きいようだ。誰しも常に成功を夢見て毎日を過ごしているのではない。毎日の豊かな経験の積み重ねの結果として成功を勝ち取るのである。その積み重ねの大切さについて、著者の人生からも改めて認識することができる。

第3章は「磨揉遷革」と題して、著者のこれまでの経験から、臨床実習、急性期理学療法、臨床研究に対する提言で構成されている。磨揉遷革とは教え諭して人をよい方向に導くことであり、これまでの経験を著者自身がさらに磨きあげる、その意味と同時に、それに次ぐ世代の理学療法士たちによって、それらがより方向に進むことを切に願った記述となっている。

ともすれば本書のような個人の履歴に関する書物は定年後出版する認識でもあるが、今回は40代前半の著者がそれをした。その意図は、平均年齢が若いこの業界により親しみをもって後輩たちにエールを送り、何事も下積み時代があつてそれを投げ出さず継続することのすばらしさを近い年代の先輩が示すことで、個々人の奮闘を期待したものであったと想像に難くない。いずれにしても、この業界の若手に対して叱咤激励する、その先駆的な本書は、この業界に新しい風を吹き込む意味においても価値ある一冊である。

●B5判・90頁・1色刷

定価 2,940円(本体2,800円+税)

2012年 三輪書店